

令和 7 年度

福祉作文コンクール入選作文集

社会福祉法人 久慈市社会福祉協議会

— 目 次 —

小学校高学年

高等學校

最優秀作	福祉という幸せ	久慈翔北高等学校	三年	泥濘 千咲	...
優秀作	災害について考えた日	久慈翔北高等学校	三年	久保田 詩乃	...
佳作	介護	久慈翔北高等学校	三年	一本松 心愛	...
佳作	私が考える「福祉」	久慈翔北高等学校	二年	南川 結愛	...
佳作	支えてくれる人たち	久慈拓陽支援学校	三年	嵯峨 瑠雪	...
審査委員の感想	...				
応募者・入選者	...				
実施要項	...				
審査委員	...				

26 24 22 20 19 17 16 14 13

小学校高学年の部

* * 最
佳 優 優
秀 秀

作 作 作

杖の大切さつて何だろう

小久慈小学校 四年

成田一桔

ぼくのおじいちゃんは野田に住んでいます。ぼくはおじいちゃんが大好きです。月に一度とまりに行きます。昔は、ぼくのことをおんぶしたり、だっこできたりするくらい、足やこしが強かつたけれど、今はじょうたいが悪く杖を使っています。車まで行つたり、乗つたりするだけでもつかれるようで、ぼくが手伝つているので大変です。

この前、総合的な学習の時間に福祉講座の白杖体験がありました。最初にやつたのは、階段を歩くことでした。杖と目かくしをしながらやつたので、けつこうむずかしかつたです。おじいちゃんは足は悪いけれど、目が見えます。この講座を受け、杖は足が悪くなつた人いがいにも使うことがわかりました。また、足が悪い人は車イスというものを使うこともわかりました。

しよう来、もしかしたら、おじいちゃんが車イスを使うことになるかもしないので、タブレットで調べることにしました。おどろいたことに、車イスは体の不自由な人が乗るだけではなく、楽しむこともできるそうです。それはパラリンピックです。車いすに乗つたままきょうぎをやります。きょうぎの種目

はバスケットボールやテニスです。ボールをあつかうきょうぎや、何も使わないでただ走るきょうぎもあるそうです。どのきょうぎも、人が楽しめるようにスポーツにてきしたものになっています。他にも車イスのスポーツが盛んになるにつれて、車イスバスケットボールに普通に歩ける人が車イスを使って参加するなど、逆の利用のされ方も生まれています。スイッチ2でも、車イスバスケのゲームもあつておどろきました。さいきんは、車イスを使つている人や歩くのが不自由な人が楽に乗りおりでくる車イスもふえてきました。

ぼくのおじいちゃんは年で死ぬかもしれません。いつ死ぬかもわからないので、不安です。だから今のおじいちゃんをだいじにしていきたいです。足が不自由だけど、一時間半のさんぽに出かけます。ぼくは助け役として見守り、いつしょにさんぽに出かけます。おじいちゃんは杖がないと動けません。杖の代わりに、ぼくのかたをかしてあげる時もあります。でも、おじいちゃんは背が高いので、ななめになつてしまい、なんか変です。おばあちゃんは上手にかたをかしてあげています。おじいちゃんのことが大好きなので、食事を運んだり、話し相手になつたりします。学校のことや、近くに流れている川のことを話します。あゆやカニなどの生き物について話すとうれしそうです。いろんなことをしてくれるおじいちゃん。ぼくが好きなアイスやゼリーなどほしい物を買ってきます。やさしいおじいちゃんで良かつたです。車イスを使うことになつたときも、やさしく押してあげたいです。

おじいちゃん、長生きしてね。

福祉の学習で学んだこと

長内小学校 四年

清水頭 旺 祐

ぼくは福祉の学習で、いろいろなことを学びました。その中から三つしようかいします。

一つ目は、福祉施設を調べることです。ぼくはデイサービスセンターという施設を調べました。ぼくが調べたデイサービスセンターは、高齢者のための施設でした。自然に囲まれた地域密着型のデイサービスセンターで、食事や入浴などの日常生活のお世話をしていく、自立した生活が送れるようにお手伝いしています。ぼくはそもそも、デイサービスセンターというものを知らなかつたので、知れて良かつたです。また、日常生活のお世話をしていることも知らなかつたので、学ぶことができ良かったです。

二つ目はバリアフリーです。バリアフリーについては本で調べました。調べたものはバスです。入り口やバス停にバリアフリーがあります。バス停は地面の高さをバスの床の位置まで上げ、段差を減らすなどしています。バスの入り口には、地面までとどくスロープがあります。バスのバリアフリーはバス 자체にもあります。それはノンステップバスというバスで、地面からバスの床まで三十四センチメートルと低く、乗り降りしやす

いという特徴があります。さらに二ーリングという装置を使って、車体を七センチメートル下げる事ができます。ぼくはノンステップバスは三十四センチメートルから下がらないと思つていましたが、さらに七センチメートルも下がることにびっくりしました。

三つ目は、白杖体験と車椅子体験です。白杖体験では、実際に歩いたり、階段を上つたり下りたりしました。目が見えない人を体験したときは、階段を上り下りするときに一段とばしそうになつたので、目の見えない人は普通に歩くときも大変だけど、階段を使うときが一番大変だと思いました。車椅子体験では、マットを段差がわりに使いました。段差一つをこえるときでも車椅子の操作の仕方がとても複雑で、乗っている人がびっくりしないようにしないといけないこともあります。とても大変でした。少しの段差でもこえるのが大変だと思いました。ぼくは、目の見えない人と車椅子を体験したときに、こんなに大変なのかと驚きました。

福祉の総合の学習を通して、福祉は体が不自由な人にとつて、大切なものだと思いました。また、体験を通して、どんなことで困っている人がいるのかも学ぶことができました。これからは接し方などに気をつけて、積極的に関わっていきたいと思いました。

福祉の学習を通して

長内小学校 四年

広 崎 心 暖

わたしが福祉の学習で学んだことは、福祉にはどのようなものがあるのかと、久慈市ではどのような福祉活動をしているかです。福祉の学習で車いすと白杖の体験をしたり孫認知症講座を受けたりしました。

福祉にはどのようなものがあるのかを調べたとき、私が調べたことは、児童福祉と障がい者福祉です。児童福祉については、そのような福祉があることを初めて知りました。調べてみて、

児童福祉法というものがあり、健康に育つけん利を全ての子どもに保障することを定めたものだと知りました。障がい者福祉については、あることは知っていたけれど、どういうものが障がい者福祉なのか調べてみたら、障がい者基本法というのが作られていました。障がいにいろいろな種類があり、それぞれ法律があつたけれど障がいが二つあつたりそもそもみとめられない障がいの人は福祉サービスを受けられていないという問題点があり、その問題を解決するために今の「障がい者総合支援法」である「障がい者自立支援法」ができたことを知りました。昔は福祉サービスを受けられない人がいてかわいそ.udだと思いました。

久慈市の福祉活動については、「元気の泉」という場所がることを知りました。活動内容は、お年寄りや障がいがある人とハンド・トレーニングや歩行会、脳トレ俱楽部などを行っていることが分かりました。

車いすと白杖の体験や、孫認知症講座も受けました。車いすでは、段差の上り下りをやってみました。上りの時、体がななめになつたような感覚がして怖かったです。白杖では、階段の上り下りが見えなくて怖かったです。足が不自由な人や目の見えない人は、毎日怖い思いをしているのかなと思いました。孫認知症講座では、認知症の症状にあるような行動をしていたら、「病院に行つたほうがいいんじゃない。」と優しく声をかけたり、認知症の人が困つていたら、後ろからではなく前から話しかけたりすることが大切だと知りました。

体験を通して車いすの人は階段を上れなかつたり、白杖の人はサポートバーがないと歩くのが難しかつたり、生活を送る中で難しい部分があるのだなと思いました。

福祉の学習を通して、福祉というのは最初どういうものか分からなかつたけれど、少しでも多くの人に幸せを送るというものだということが分かりました。これからは、高齢者や障がい者を見かけたら優しく声をかけたり、手伝えることを探したりして、優しく接することを心がけたいです。



中
学
校
の
部
* * * 最
佳 優 優 秀
秀 秀
作 作 作

小さな優しさに気づいた日

長内中学校 三年

上見 瑛

ある日、祖母と一緒に出かけていたときのことです。足が悪い祖母は、いつものようにゆっくり歩いていました。すると、私たちのそばを小学生くらいの男の子が走つて通り過ぎていきました。

祖母は脇によけて、「危なかつたね。」とつぶやきました。私がその男の子に声をかけようとしたとき、その子の母親がそつと男の子に近づいて、耳元で何かを話しました。

すると、男の子は少しもじもじしながらこちらを見て、「ごめんなさい。」と小さな声で言いました。それを聴いて、祖母はにこにこしながら「ありがとう。」と言いました。私はほつとしました。

今までは、「福祉」というと、「特別な資格を持った人が、支援を必要としている人を助けること」だと思っていました。しかし、あの日のように、誰かの気持ちに気づいて行動することも福祉の一つなのかもしれないと思えるようになりました。

祖母は、足腰は弱くなっていますが、気持ちは元気そのものです。だから、特別な支援は必要ありません。でも、心が温かくなるような「支援」はあった方がいいです。

「年を取るって、悪いことばかりじゃないよ。」と祖母はよく言います。そんな祖母の言葉を聞くたびに、高齢者は「守るべき存在」ではなく、「共に生きる存在」として考えるようになりました。

今後、社会はますます高齢化が進んでいきます。そのような社会に対応していくためには、特別な制度や技術も大切でしょう。しかし、それだけではなく、「ちょっととした気づき」や「思いやり」が誰かの心の支えになる大きな力になります。そして、それは高齢者に限ったことではありません。

例えば、学校でも「困っている人に声をかけてみる」「譲り合う」など、小さな優しさを自然にできる人が増えたら、温かい、安心できる学校になるでしょう。これも「福祉」の一つと言えます。

あの日の、「ごめんなさい。」と「ありがとう。」この二つの言葉は、私に「福祉」の原点を教えてくれました。これからの中社会が、小さな優しさにあふれた社会になつてほしいと願います。

私はこれからもずっと、小さな優しさに気づける人でいたいです。そして、誰かの心を温め、支えられるように、小さな優しさのある行動を心がけたいです。

僕とおばあちゃん

夏井中学校二年

國丹祈絆

私の祖母はアルツハイマー型認知症です。それが分かつたのは、私が中学校に入学した春のことでした。中学校に入学して、忙しい日々を送る私は、一緒に住んでいる祖母をあまり気に掛ける余裕もありませんでした。しかしある日家に帰ると突然、「おばあちゃん、アルツハイマーになつたよ。」と、告げられました。

私はおばあちゃんっ子だったので、その言葉を聞いた時、嘘であつて欲しいと心から思いました。しかし、日に日に出来ないことが増えたり、色々なことを忘れていつたりする祖母の姿を見ているうちに、それが現実であることを受け止めなければなりませんでした。元気に動き回っている祖母の昔の姿を思い出す度に、つらく悲しい思いが何度も込み上げてきました。それでも、この現実から目をそらしてはいけないと決心し、私は行動を起こしました。祖母とふれあう時間を増やしたり立つことなどの動作を手伝つたりして、祖母が私のことを覚えている内に、やれることをどんどん行いました。そうしていると、家にいる時でも祖母は最初に私を見つけ、笑いかけてくれました。その笑顔を見ると、嬉しさと同時にいつか私のことも忘れ

てしまうのかなという怖さもあり、私はなかなか笑顔を返すことができませんでした。
そんな日々を送っていたある日、祖母が突然自転車を持ち出しど、
「散歩に行つてくる。」

と一人で出掛けようとしたことがあります。正直、自転車に乗れるような体の状態ではなく、道も恐らく分からなくなつてしまつていています。どうしても行くと言つてきかない祖母を家族は必死で止めていました。私も祖母の安全を考えると止めなければと思いましたが、祖母の今にも泣きだしそうな表情を見ていると、何だか胸が苦しくなつてきました。

「自転車は僕が引いて歩くから。おばあちゃんと一緒に僕も散歩に行きたい。」

気がつくと、母にそう伝えていた自分がいました。その言葉を聞くと、祖母はまた笑顔になりました。車道側の道を私が、歩道側の道を祖母が歩き、ゆっくりと散歩を始めました。道中、祖母は昔話を楽しそうに笑顔で話してくれました。「一緒に散歩に来てよかつた」祖母のためと思つてした行動でしたが、私にとつてもその時間は幸せなものでした。

家に着くと、

「一緒に出掛けってくれて、ありがとう。」

と祖母は言い、満足そうな様子で自転車を車庫にしまつていました。そんな祖母を見ていた母や兄も、私に「ありがとう。」と声をかけてくれました。祖父も認知症だつたため、母はその

ときの様子や気持ちを話してくれました。

「認知症の方は、否定されることが一番つらいんだよ。」

その言葉を聞いて、全てを受け入れることは難しいかもしけないけれど出来る限り祖母の願いを叶えてあげたいと心から思いました。やっぱり私は、おばあちゃんの笑顔が好きだからです。



佳
作

これからの中の介護士

大川目中学校 二年

大下幸子

現在、祖母は介護施設に入所したため、会う機会はめっきりと少なくなってしまいました。それでも、私は少しでも祖母に会いに行きます。もしも、祖母が私と一緒に過ごした日々を忘れてしまっても、私が覚えておき、何度でもたくさん話をして、何度も笑わせてあげたいです。いつまでも祖母は大切な存在であり、一緒に過ごしている時間は私の宝物です。

以前、私の父は、「元気の泉」という福祉施設に勤務をしていました。一度、だけ休みの日に父と一緒に施設の中に入つたことがあります。そこには、椅子に座つたままでできる運動の紹介や、施設内の交流会のお知らせなど、高齢者に向けたポスターが貼つてあつた。そこから私は高齢者福祉の仕事に興味を持つようになった。

日本は今、超高齢社会である。しかも、高齢社会という状態は私が生まれるずっと前から続いているらしい。このままだと若者が減り、お年寄りを介護する人がどんどん減ってしまうことになる。これが一番の高齢者福祉の問題だと思う。実際に、「老々介護」という言葉を聞いたことがある。お年寄りがお年寄りを介護するなんて本当に大変なことだと思う。これからも日本の高齢化はどんどん進んでいくと言われている。そんな中で高齢者を支える仕事が減つてしまつては、お年寄りの生活が困難になつてしまふだろう。若い人が少ない今、大切なことは、できるだけ多くの人が福祉に興味を持つことだと感じている。たくさんの若い人が福祉の仕事に就き、日本の福祉の質が上がるサービスを受ける高齢者も安心して生活することができる

と思う。

先ほど述べた通り、今の日本は介護士の人数不足が問題なら、なぜ介護士の仕事を選ぶ人が少ないので。その理由の一つに、仕事の大変さの割には給料が少ないことが挙げられるそうだ。確かに、人と接してサポートする仕事だから、重労働なうえに、責任が重く、入所者やその家族とのトラブルなどで悩むこともあるかもしれない。とても過酷な仕事だ。

そこで、私は高福祉の国ではどのような政策をしているのかを調べてみた。すると、北欧諸国では高い水準の福祉を平等に提供ができていて、安い費用で医療や介護サービスが受けられるということが分かった。そのような政策が行える理由は、税率二十五パーセントという高い消費税のうち、約十二パーセントを社会保障に使用しているからだつた。日本が今から税率を上げることは難しいと思うが、税金や年金などから、社会保障の割合を少しでも増やせたら、年々増えているお年寄りの介護も国からのサポートで徹底できると考える。つまり、高齢者福祉の問題には施設の整備や介護士の人数不足だけでなく、国からの支援や介護士の給与の見直しが大切だと私は思う。

少子高齢化の問題は、老人が増え、若者が減ることだ。そして、一度そのような状況になつてしまつたら元に戻すことが難しいため、このような状況に対応できる規模でのサポートが必要になると考える。介護士などの福祉関連の仕事をする人を増やすためには、金銭面での問題を解決するだけでなく、小さいころから福祉の知識を身に付けたり、様々な職種について知つ

たりすることも大切だ。私自身も、今の日本の少子高齢化や介護士が不足している問題などにもつと興味や関心を持ち、学んでいきたい。

この先、自分の親や自分に介護が必要になつた時、安心して生活できるよう、若くて元気のある人がたくさん介護の仕事を就き、介護施設が国からの支援をしっかりと受けられるような社会になつていてほしいと思う。



今、変わるべき人

久慈中学校 三年

田代幸

二〇二四年度、日本でのいじめ認知件数は、過去最多の732568件であつたらしい。また、中学校での認知件数も過去最多であり、私達も、いじめをより大きな問題として捉えていかなければいけない。

では、なぜいじめはなくなるのか。そして、どうすればなくなるのだろうか。

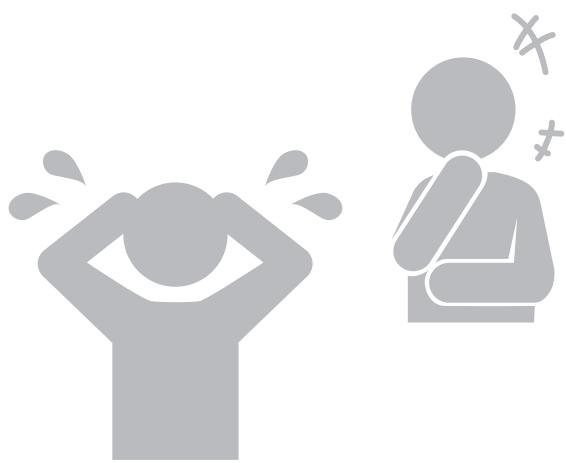
先日、ネットであるいじめの事例を読んだ。これは、小学校で起こつたいじめについての事例であり、小学六年生の女兒が、一年以上に渡り、執拗ないじめを受けていた、という内容であつた。このいじめは同級生によるからかいから起こり、さらには学級崩壊によりエスカレートした。この事例は、死者が出るほど悲惨な事件となつたが、いじめのきっかけは、私達の学級で起こつていることと大きな差がないといえる。つまり、このようなないじめは、どの学校でも起こりうることだということが分かる。実際、私達の学校でもからかいがよく聞こえる。よつて、私達の身の回りでもいじめがないと言い切ることはできないのだ。

ではどうしたらいじめがなくなるのだろうか。この問いつ

いて、事例を読み、気付いたことがある。それは、いじめに直接関わっていない傍観者が、いじめの雰囲気をつくっている、ということだ。事例では、いじめをしている同級生達の、次のいじめの対象になることを恐れて、いじめを止めようとしないという状況にあつた。このような状況があることで、学級全体でいじめを許してしまった雰囲気がつくられる。その雰囲気が、いじめをよりひどいものにしてしまうのではないだろうか。この根拠として、事例に書かれていた学級崩壊が挙げられる。当時、このいじめがあつたクラスでは、先生の呼びかけや注意を無視する、授業に取り組んでいない生徒が多い、などのことが問題視されていたそうだ。この雰囲気をつくっているのが、いじめでいう傍観者なのである。つまり、いじめを無くすためには、いじめに直接関わっていない傍観者が変わるべきなのだ。

私達の学校でもいじめが起きているかもしれない。私達も、傍観者の一人として、いじめを無くすために変わらなければいけない。私は、この事例を通して、いじめを無くすために大切なことは、いじめを許さない環境づくりだと考えた。一人一人がいじめのない安心な環境で過ごすことが実現できたなら、全員が個性を尊重し合える学級づくりも可能だと思う。では、いじめを許さない環境をつくるために、私達はどうすべきなのだろうか。私は、全員が一人一人の個性を認め合うべきだと考えた。例えば、一人が自分の好きなものを紹介したとき、それを受けなすのではなく、それも個性だと認め、「いいね。」などと伝えてみる。話し合いなどで意見を交流するとき、相手の意見につ

不満があつても、暴言で相手を攻めるのではなく、話を最後まで聞いてあげる。そのような小さな行動の積み重ねが、いじめを許さない環境づくりに繋がっていくはずだ。いじめを無くし、より安全な学級をつくつしていくために大切なことは、一人一人が自分の好きなもの・得意なこと・強みを理解して主張すること。そして、全員でそれを認め合うことだと考えた。そうやって全員が輝ける環境を、全員でつくつしていくことが、今の私達にできることなのだ。一人ではつくれない環境、だからこそ皆で協力して成しとげていく必要がある。いじめを見て、何もしない私達が声をあげ、変えていくのだ。今、変わるべき人は、私達・傍観者だった。



佳 作

みんなちがつてみんなないい

侍浜中学校 三年

久世 未桜

自分のことを「普通」の人間だと思つてゐる人は多いだろう。では、「普通」では無い人、と会つて話したことはあるだろうか。そして、その「普通」とは何か考えたことはあるだろうか。

私は知的障害をもつ従弟がいる。私からすれば、一緒に遊んだり、ご飯を食べたり、仲良く交流してゐる普通の親戚だ。でも、時々、言葉が通じなかつたり、赤ちゃんのような態度をとつたりすることがあり、その度に私は、「やっぱり普通の子とは少し違うんだな」と感じていた。

ある日、私は叔母からこんな話を聞いた。従弟には、小学校四年生の姉がいるのだが、その姉に同級生が、「どうして○○君は別の学童に行つてゐるの。同じ小学校なのに、どうして?」と聞いたとのことだつた。

従弟は、学校の隣にある学童ではなく、周りの大人が支援してくれる、少し離れた学童に通つていた。小学四年生の子には、そのことが気になつたのだろう。その話をした叔母は少し怒つた様子で「少しは察してほしい。」と言つていた。それを聞いた私も、見た目では分からぬかもしれないけど、行動を

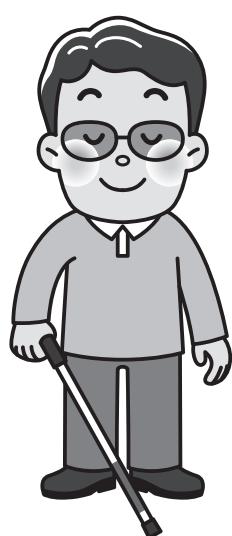
見たら分かりそうなのに、と思った。しかし叔母や私が言つた「察する」とか「分かる」とは何を意味するのだろう。その子は、見た目が同じだからこそ、従弟の持つ障害に気づかなかつたし、何の悪気もなく発した言葉だつたのかもしれない。むしろ私たちの方が、従弟は普通じゃないから、と意識し、常に周囲の目や対応を気にしながら行動していたかもしれない。そう気がついた。

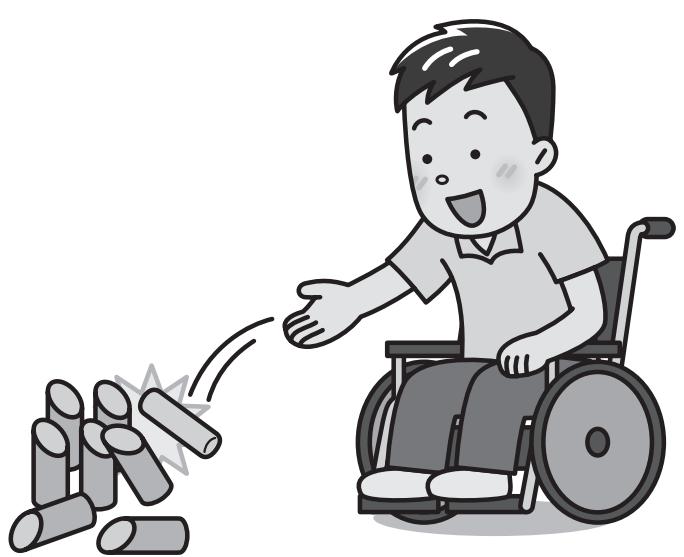
では、「普通」とは何なのだろう。自分の中でいろいろ考えた。みんなとスムーズに会話できること？親や周りの言うことを聞いてすぐ動けること？考えはたくさん思い浮かんだが、どれもしつくりこなかつた。そしてインターネットで色々なことを調べていたときこんな言葉が出てきた。それは、「みんな違つてみんなない」という、詩人である金子みすゞさんの言葉だ。これは「わたしと小鳥と鈴と」という詩の一節で、「それぞれ個性と能力が違つっていてもそれでよい」という意味を持つ言葉だ。それを見て私は、たとえハンディがあろうと、それも個性だし、お互に認め合おうという意味だと思った。だから、自分で見て、普通じゃなくても、周りと少し違つても、それは個性だ。自分の普通を相手に押し付けるのではなく、認め合つてお互いの得意なことを補い合うことで、普通と普通ではないという認識が無くなるのではないだろうか。

そして、私が無意識にしてしまっていた、相手をすぐ助けようとする行動。これも、相手の気持ちを考えず、自分本位に押し付けてしまっていた行動ではなかつただろうか。それを急に

変えることはできなくても、次のような考え方はできると思う。相手のできることまで、完全に代わりにやつてしまふのではなく、少しつまずいても、さりげなく助ける。「大丈夫？手伝おうか」と声をかけてから行動する。相手が普通にやろうとしていることをいきなり奪つたら、誰だつてびっくりするだろう。こんな寄り添い方ができれば、お互いが気を遣うことなく、もつと過ごしやすくなるのではないだろうか。

これから、もし私の従弟のような人と出会つたら、今までよりも少し勇気が出せる気がしている。心では気になりながら、でも、見過ごしてはいたこれまでの自分。近づいて見守つたり、「お手伝いしましようか」と声をかけたり、さりげなく行動できるようになりたい。そして、みんなが思う「普通」から、みすゞさんの「みんなちがつてみんなない」が当たり前の社会になるよう、私も私ができることを頑張つていきたいと思う。





高 等 学 校 の 部

* * *

佳 優 最 優 秀

秀 秀

作 作 作

福祉という幸せ

久慈翔北高等学校 三年

泥濘千咲

「幸せって何だろう。」

Cryystal Kayさんの

「幸せって。」

という曲を初めて聴いたとき、私はなぜか胸の奥が温かくなり、同時に少し切なくもなった。歌の中に流れる優しさや人のつながりは、私が介護福祉を学び、実習を通して見つめてきた現実と重なっていたからだ。

介護福祉を学び始めた頃、私は笑顔でいられること、健康であること、家族で過ごすこと、それが誰にとっても幸せだと思つていた。しかし、現場実習で多くの人と出会う中で、その考えは大きく揺らいだ。ある高齢の利用者さんは、毎日同じ席に座り、他界した旦那さんとの写真を眺めていた。声をかけると穏やかに微笑むが、ほとんど言葉は返つてこない。その表情を見て、最初は

「退屈ではないのだろうか」

と思った。しかし実習を続けていくうえで、その方は毎日、写真を大切そうに持ち歩き他の利用者の方や職員の方に見せ笑顔で交流していることを知つた。昔の記憶と写真を照らし合わ

せ、他の利用者の方や職員の方と交流することが、その人にとっての一日の喜びだと思った。その瞬間、私は「幸せの形は人それぞれなのだ」と心から感じた。

一方で、病気や障害の影響で、思うように体を動かせない人もいる。中には、痛みや不安から笑顔を見せられない日もある。その姿を前にすると、

「幸せ」

という言葉があまりにも遠く感じされることもあった。しかし、そんな中でも、家族が来て手を握ってくれた瞬間や、好きな歌を聴いて口が緩む瞬間に幸せを感じているのではと私は思つた。

私は、ボランティアや現場実習を通して子どもから大人、高齢者まで、さまざまな人と出会つた。それぞれの人生、それぞれの背景があり、何を幸せと感じるかは本当に違つていた。子どもにとつての幸せは誕生日に欲しいおもちゃを買ってもらつたときや、テストで満点を取つたとき、友達と遊ぶことかもしれない。大人にとつては、家族の笑顔や仕事の達成感かもしれない。そして高齢者にとつては、ただ今日を生きられたことそのものが幸せなのかもしれない。私はそこで学んだ。「自分が幸せだと感じることと、他人が幸せだと感じることは同じではない。」ということ。むしろ違つていて当たり前なのだと。大切なのは、その違いを否定するのではなく、認め、尊重することだと思う。もちろん、介護の現場には、幸せなことばかりが

あるわけではない。別れの場面や、苦しみや悔しさに向き合う

日もある。それでも、その中で誰かが少しでも安らぎを感じられる瞬間をつくれるのなら、それは大きな意味を持つのではないだろうか。私は思う。

「わたしはわたしらしく、あなたはあなたらしく」

生きることが、何よりの幸せだと。人と比べたり、同じ形の幸せを求めたりする必要はない。一分一秒でも生きている、その事実こそが幸せの根っこにあるのだと感じる。もし介護福祉を学ばなければ、私は今も、「幸せ」

を一つの形に押し込めていたかもしれない。けれど、今は違う。幸せは人の数だけ存在し、そのどれもが尊く、正しいのだと信じている。

これからも私は、この思いを胸に歩んでいきたい。介護の現場で出会う人の、

「幸せ」

に耳を傾け、それを守り、支えられる存在でありたい。そして、私自身も、自分らしい幸せを見つけ続けていきたいと思う。

「幸せってなんだろう。」

この問いの答えは、一つではない。けれど、その答えを探し続けることこそが、私にとつての幸せなのかもしれない。

優秀作

災害時について考えた日

久慈翔北高等学校 三年

久保田 詩乃

七月三十日、私はいつものように学校で部活動を行っていました。八時半からの部活に少し早めに着き、扇風機の前で涼み、ミーティングが始まるのを待っていました。八時半になりました。全員が集合し、ミーティングをしていると、急に外からアラートが流れ、「津波に注意しろ」というアナウンスが市全体に響き渡りました。なぜ大きい地震もなにもきていないのに急に津波がくるんだろう。と疑問に思い、スマートフォンで調べてみることにしました。するとでてきたのは・カムチャツカ半島付近でM八・七・という記事でした。記事と一緒に出てきた地図を見て、私は正直、こんなに遠い場所なら津波は来ない、大丈夫だと勝手に決めつけていました。それにきっと私だけではなく部員のみんなもそこまで危機感を持つていなかつたはずです。夏のコンクールも近い事から私達は、安全を確保しつつすぐコミュニケーションを図れる距離での部活動を再開しました。三十分程練習を行い休憩で外が見えるベランダへ行くと、かなり遠くの方から小さい子ども達と数人の大人が急いでこちらに向かってくるのが見えてきました。私は何かの行事へ向かっているのかなと思い練習を再開しようと教室へ戻った瞬間下

にいた部員の子達が走つて教室に入り、「今から保育園の子達と中学生が避難してくるみたい。誘導のために早く下に行かなないと。」と告げられ、私達もその子達についていきました。二階から入り口まで階段を下つていると、もう既に一階あたりから廊下が人でいっぱいになつていて身動きをとるのも難しい程度でした。部員は一階、二階、三階に分かれ、四階のクーラーがついている教室へ避難してくる方々を誘導しました。その時私は、地域の方々の災害への意識の高さに感心し、それと同時に、津波は来ないと勝手に決めつけていた自分がとても恥ずかしくなりました。避難してきた方の中には高齢の方も多くいらっしゃり、学校のエレベーターを使い案内することができました。学校にはスロープもありますが、二階までしかないので災害時は高齢の方や身体障害を持つている方への対応の仕方を全体で共有する事が大切だと感じました。

地域の方々の避難が少し落ち着き、保育園児や中学生のおむかえに親御さんがおむかえに来るぐらいで、人の行き来が減りました。部員のみんなも四階に集まり、休んでいました。その頃私は、系列の担当をしてくださっている先生の小学一年生の息子さんと一緒に待機していました。クーラーはついているものの、人が集中しているためかなり暑く感じとても体調が心配でした。その時に、一年生の女の子が手持ちの小型扇風機を私に差し出し、「これよかつたら使ってください！」と言つてくれました。自分も暑い中でも、小さい子供のために譲つてくれた事に私はとてもあたたかい気持ちになりました。小学一年生

の子も、涼しいトリラックスできていて一安心しました。一緒にゲームをしていると、ある男の子が私たちの前に来て「よかつたら」とクッキーを渡してくれました。ヒビが何か所か入っていたのできつとりュックに入れておいて後で自分で食べようとしていたものだつたのだと思います。しかし、少しでも元気になれたら、と渡してくれたのだと思います。私はこの二人を見て災害時についてとても考えさせられました。災害時は、普段と違う環境で心のよゆうがなくなつてしまふ人が大半だと思います。そんな中で『自分よりも相手の為に』動ける人が身近にいてくれる事がとても誇らしく感じました。

この事から私は災害時の行動を改める事にしました。まず第一に『絶対に安全という場所はない』ことです。私は正直、こんなにも多くの方々が避難してくるとは思つていなく、とても驚きました。私もそれを見習い、自分で自分の安全、相手の安全を確保できるような人になりたいです。そして、『大変な時こそ相手を思いやる行動を』ということです。まずは自分の精神や体が落ち着くのが一番なのは前提です。しかし、災害時は子供、高齢者、身体に障害を持つている方など、行動に制限が出てきたり、この状況が私たちの年代よりも多くのハンデになつてしまふ方々が一つの場所に集まる事になります。とても苦しい環境になつてしまいますが、そんな時こそ自分にできる事を探し、全員で苦しい環境を乗り越えられる社会にしていきたいと感じました。そのために自分に何ができるかを見つけ、相手を思いやる行動をしたいし、そのような思いを持つ人が増え

る事が私の願いです。

七月三十日、お昼過ぎからどんどん親御さんのおむかえと一緒に帰る人が増え、警報もその日のうちに解除されました。津波の被害を受けた人も居ないと聞き安心しました。今回の事は訓練と捉え、安心安全で暮らせる日々を目指します。

佳作

介護

久慈翔北高等学校三年

一本松心愛

私は、二年間の現場実習やボランティアを通して、認知症の人と過ごすのも案外楽しいものだと感じていました。汚物処理や入浴介助など家庭で支えるには厳しい場面もあるけれど、一人くらいならなんとかなるんじやないかな、と少しだけ思つていきました。

私は、祖父母と一緒に住んでいます。祖母は六月頃から薬での治療をしていましたが、今まで通り、普通の生活を送っていました。祖母の「あれ、ちょっと変だぞ」という変化に気が付いたのは、本当に突然でした。日付けを間違えるようになり始め、「今日は九日だよ。」と伝えても「そうか、なら今日は十二日か。」と訳の分からぬことを話しました。始めはみんな「ついにボケがきたんじゃない」と笑い話にしていましたが、それ

から二日程後には名前を思い出せなくなりました。「こつちは誰？」と聞いても、「なんだつたかな。」と言いながら、妹の名前しか言つてくれませんでした。いとこの名前も思い出せず、いよいよ本気で笑えなくなりました。自分から、「ことあだよー」と言つて話しかけても、違う人の名前に変わつてしまい泣きとなりました。昨日までは普通に会話して、いとこが来るのも楽しみにしていたのに、急に全部を忘れてしまった祖母を見て、悲しさもあつたけれど怖いなと一番に思いました。

その日は一度様子を見よう、明日からもつと話しかけるようにしようと話し終わりました。夜、布団に入りながら「明日もこうなのかな」、「薬の副作用だから落ち着いたらまたいつも通りになるかな」と考えると、寂しい気持ちと不安な気持ちでマイナスになりなかなか寝つけませんでした。しばらく考え方をしていると、おふろ場からイスを引くような音が聞こえた気がしました。夜中の十二時頃だったので、怖くて見に行くのをためらつたけれど、やっぱり音が聞こえる気がしたので念のためにと見に行きました。すると、祖母が暗い中一人で立つていました。電気をつけてどうしたのと聞くと、妹に「お風呂に入れと言わされたから入った。」と二回目のお風呂に入ってきたようでした。見ると、祖母の髪は濡れていって、長袖のTシャツを下に履いていて私は一気に怖くなり母を起こしました。母もその様子を見てすぐ病院に連絡していました。その間、一人にする訳にもいかないので私がそばにいたけれど、何回も同じことを繰り返したり、物を見間違えたりする祖母を見ているのは怖く

て心臓がとてもバクバクしました。認知症の人と症状は同じなのに、こんなに怖いと感じたのは、自分のおばあちゃんだったからなのかなと思います。実習で見た状況と同じなのにこんなに焦つたのは、その症状が急に出て別人のようになつたからなのかなと思いました。

施設に入所する方が多いのは、二十四時間気を抜けないという理由なども沢山あるけれど、自分の親のこんな姿見たくない

という精神的なものも、その中に含まれているのかなと思いました。実習でも、職員の方から「他人の介護は仕事だと思えば乗り越えられる。でも自分の親となるとそうはいかない。」と聞いていました。私は自分の親だからこそ大切にしたいんじやないんだとその時は思つていましたが、疲れた顔が増えた母を見てそれ以上に思うものが大きいだろうなと感じました。始めから認知の方を見ると、自分を何十年と育ててくれた親を介護するのでは全然違うなと思いました。

お医者さんには、薬の副作用や熱中症の症状から出たものだから大丈夫だと言されました。祖母も今は落ち着いていて、また前のように名前を呼んでくれたのがとても嬉しかつたです。いつまたあの時みたいになるか分からぬのがとても怖いです。名前も忘れてほしくないしもうあの時の祖母も前みたいに元気がない母も見ていたくないので早く前みたいな何でもない日に戻つてほしいです。

佳 作

私が考える「福祉」

久慈翔北高等学校 二年

南川結愛

私たちが暮らしている日本では、これからますます「福祉」の力が必要になると言われています。今、日本では少子高齢化によりお年寄りの数がとても増えています。その一方で、若い人の数は減つていて、働き手が少なくなっています。そうなると、介護や医療を必要とする人が多い中で、それを支える人が足りなくなるいう問題が生まれると思います。

例えば、介護の現場では、人手不足が深刻だと聞いたことがあります。実際に、現場実習に行かせていただいて、介護の人手不足を実感しました。また、介護の仕事は体力も必要で、とても大変です。夜勤などもあり、長い時間働く事も少なくあります。そのため、辞めてしまう人も多いというニュースを見ました。人手が足りなければ、お年寄り一人一人に対する丁寧なケアをするのが難しくなってしまうと思います。これでは「安心して老後を過ごす社会」と言えません。福祉を支える仕事を大ににして、働く人が続けやすい環境を作ることが必要だと感じました。

また、障害のある人や病気を持っている人への支えも欠かせないと思います。今では学校や街の中に点字ブロックやエレベ

ーターが整備され、誰でも使いやすいように工夫されています。でも、まだ不十分な所もあると思います。制度や設備を整えることも大切ですが、同じくらい大切な事は「心のバリアフリー」だと私は思います。困っている人を見た時に自然と声をかけられる社会になれば、みんなが安心して暮らせると思います。

さらに、経済的な福祉も大事だと思います。日本は豊かな国だと言われていますが、実際には十分な食事ができなかつたり、学ぶ機会が制限されてしまつたりする子どももいます。もし福祉がなければ、家庭の経済状態によって将来の可能性が大きく変わってしまいます。そうならないように、みんなが平等に夢持てる社会を作ることが福祉の役割だと思います。

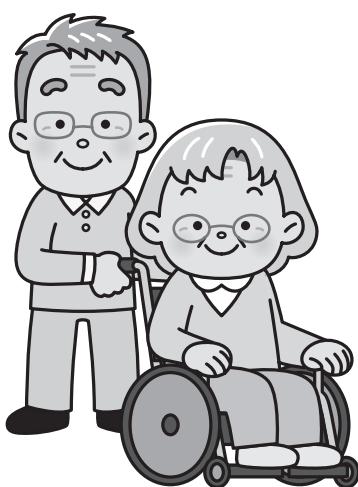
災害の時にも福祉の重要さを感じると思います。日本は地震や台風が多い国です。被災した人々が避難所で食事や毛布を受け取ることができるのは、福祉の仕組みがあるという事を知りました。私は東日本大震災のニュースを見た時、助け合いの力の大きさを知りました。あの時多くのボランティアが駆けつけたのも、福祉の心を体現した姿だと思いました。

このように考えると、福祉は単に「弱い人を助けるもの」ではなく、社会全体を守る大きな仕組みだという事に気づきました。誰でも年を取りますし、病気や怪我をすると思います。そのため福祉は「他人事」ではなく、「自分の事」だと思います。もし今の日本が福祉を軽視してしまえば、将来の私たち自身が困まる事になると私は思います。

私たちにできる事は、身近にたくさんあると思います。例えば、電車で席をゆずる事や地域のボランティア活動に参加する事なども小さな福祉の一つだと思います。また、福祉について学び、関心を持ち続けることも大切だと思います。

これから日本はますます高齢化が進み、少子化も深刻になると言われています。その中で福祉をどう発展させていくかが、社会の安定につながっていくと思います。私は、「福祉＝やさしさの形」と考えていました。制度や仕組みを作ることはもちろん大切ですが、それを支えるのは人と人との思いやりだと思います。助け合いの心を忘れないければ、福祉はもつと良い方向に進んでいくことができると思います。

福祉を考える事は、社会の未来を考えることと同じだと思います。私はこれからも福祉について学びを深め、自分にできる事を探し、少しづつでも実践していくようにしていきたいと思います。そして、大人になった時に少しでも社会に貢献し、「この社会で暮らせてよかったです」と思えるような未来をつくつていけるようにしたいです。



支えてくれる人たち

久慈拓陽支援学校 三年

嵯峨瑚雪

私は高等部三年生で、平日は寄宿舎で生活し、金曜日は放課後デイサービスで過ごしている。私は、高等部になつてから、社会に役立つことや、働く上で大切なことを学んでいる。色々大変なことはあるし、めんどくさいと思ったこともあるが、それは社会に役立つための勉強だと思つて勉強している。

進路実現に向けて実習など経験し、楽しいときもあれば大変なこともあるけれど、働く上で大事なことを学んでいると思っている。良かつたところもあれば、課題もあるが、大人になつてからでは教えてもらえないこともあるからこそ、今学生のうちに学べば、社会に出た時に役立つということを改めて感じている。

放課後デイサービスでは、お金の使い方や断り方などの社会に役立つ事をたまに教えてくれる！先生たちが生協で私が食べそうな物を頼んでくれて、それを冷蔵庫、冷凍庫に入れて、私が行くときに帰りに持たせてくれるおかげで、朝ごはんを食べることができていて、苦手な人がいることを先生が知ってくれていて、困った時があつたら助けてくれる。自分も、先生が持つてる荷物を持ったり、後輩がやらない掃除を代わりにやつた

りする。

寄宿舎では、私が苦手な夕食や朝食が出たら、他の人が食べてくれる。自分は、コップを洗うときに他の人のコップも洗っている。

家では、お父さんに、家の風呂掃除やトイレ掃除やお皿洗いをしてもらつていて、すごく助かっている。私は、家で料理を土日作つていて、そして、嫌なことがあつても辛かつたことがあつても、推しを見るだけで救われる。

こうやつて助けられたり、助けたりするのは、やりがいがあり嬉しいことでもある。自分ができることなら助けたいと思っている。

この世は、悪い人ばかりじゃないってことが分かった。



審査委員の感想

審査委員長 石川えりか

○講評（中学校の部）

今回の福祉作文コンクールでは、時代を担う中学生の皆さんが、日常の中で感じた思いやりや助け合いの心を、自分の言葉で丁寧に綴つてくれました。どの作品にも、身近な人との関わりや地域での体験を通して、自分なりの「福祉」への気づきが込められており、読む人の心に温かく響くものばかりでした。

最優秀賞の「小さな優しさに気付いた日」では、祖母と少年のやりとりを通して、思いやりのある行動が安心を生み出すことを描いています。高齢者を「守るべき存在」ではなく「共に生きる存在」として捉える視点は、福祉の本質を見事に表現しており、日常の中にある優しさの大切さを教えてくれます。小さな気づきが大きな安心につながるというメッセージは、誰もが実践できる福祉のかたちとして心に残ります。

優秀賞の「僕とおばあちゃん」では、認知症の祖母との関わりを通して、相手の気持ちに寄り添うことの大切さが描かれています。現実を受け止め、祖母の願いに応えようとする姿勢は、福祉における「支え合い」の力が感じられました。祖母との時間が本人にとても幸せなものだったという気づきが、福祉は誰かのためだけでなく、自分自身の心も豊かにするものだということを伝えてくれます。

その他の作品でも、障がいや高齢、災害、貧困、動物福祉、いじめ、ソーシャル・ネットワーキング・サービスの問題など、さまざまなものテーマが取り上げられ、それぞれの視点から「福祉とは何か」を考える姿が印象的でした。自分の体験を通して気づいたことを言葉にすることで、地域への理解と関心が深まり、福祉を身近なものとして捉える力が育まれていることが伝わってきます。

福祉は特別な人だけが関わるものではなく、誰もが支える側にも支えられる側にもなるものです。だからこそ、身近な優しさに気づき、行動に移す力を大切にしながら、地域とともに歩む心を育んでいくことが、これからの中学生にはとても重要です。皆さんの言葉が、未来の福祉をより豊かにしてくれると信じています。このコンクールを通して育まれた思いやりの心が、地域のあたたかさとなつて広がっていくことを願っています。

副審査委員長 竹林直美

○講評（小学校高学年の部・高等学校の部）

福祉作文コンクールは、次世代を担う小・中・高等学校の児童生徒の皆さんに福祉作文を通じて、思いやりや助け合いの心を養い、自分たちが暮らしている地域への理解と関心を高めることを目的として実施されています。

今回、小学校高学年の部には、七編の応募がありました。最優秀に選ばれた作品は、杖を使って生活している大好きな祖父との日常のふれあいに、総合の学習で行つた白杖や車いすの体験活動を通しての気づきが加わり、祖父のために自分ができることを考えて実践していく思いが感じられる温かい素晴らしい作品です。祖父と孫の幸せな関係が伝わってきました。ほかの作品も、学校で行う福祉体験学習を通して、これから自分ができることをしていきたいという素直な思いが伝わつてくる作文で、素晴らしいです。

高等学校の部の応募数は、十三編でした。高等学校の部の最優秀作品は、「幸せ」がテーマの作品です。幸せとは、どういうことか。介護福祉を学び、現場実習を積んでいく中で、「幸せ」は、人によって違うこと、一つの形ではないことに気付き、そして、介護の担当者として出会う人たちそれぞれの「幸せ」に耳を傾け、支えていく人になりたいと述べられています。また、自分も自分の幸せの答えを探していきたいという前向きな一文で締められています。介護される人もする人も幸せなことがまさに、福祉の考え方であり、本コングルールの趣旨にぴったりの素晴らしい作品です。ほかの作品は、授業での学び、介護実習体験から気づいた事、災害時に考えたこと、身近な人の介護実体験、周りの人を助けたり助けられたりしながら進路実現に向かつて頑張る日常を書いた作品など素晴らしい作品がありました。経験や体験がもとになる思いは、リアルで生き生きしていて、心を打たれました。また、どの作品にも前向きな意欲が述べられ、これから高校生の活躍に大いに期待できると感じました。

今回の審査を通して、さらによい作品にするにはという点で、審査員からの意見を申し上げます。自分の思いや気づきの広がりをもつと作文の中に入れてほしいことです。福祉体験をしたことのみ、本などで調べて分かったことのみに終始するのではなく、学習したことなどが自分の経験と結びついたのか、さらに考えが広がつたり視野が広がつたりしたことはなかつたのか、もう少し聞いてみたいと思いました。思いを伝えるには、やはり、ある程度の文字数も必要になつてくるでしょう。

最後に、「福祉」について考えたみなさんに心から拍手を贈ります。深く考えたことに価値があります。さらに、いろんな経験、体験を積んで行動し、すべての人の幸せのために、周りの人への思いやりや助け合いを広めていってほしいです。

令和7年度福祉作文コンクール応募者・入選者

■小学校高学年の部

No.	学校名	学年	氏名	題名	賞
1	長内小学校	4	清水頭 旺祐	福祉の学習で学んだこと	優秀作
2	長内小学校	4	高橋 駿人	孫認知症講座のふりかえり	
3	長内小学校	4	内城 奈緒	福祉の学習で学んだこと	
4	長内小学校	4	西野 和穂	福祉体験のふりかえり	
5	長内小学校	4	広崎 心暖	福祉の学習を通して	佳作
6	長内小学校	4	三河 愛実	福祉の学習で学んだこと	
7	小久慈小学校	4	成田 一桔	杖の大切さって何だろう	最優秀作

■中学校の部

No.	学校名	学年	氏名	題名	賞
1	大川目中学校	2	大下 幸子	これからの中介護士	佳作
2	大川目中学校	1	峰館 皇成	僕のひいおばあちゃん	
3	長内中学校	3	柏木 風真	明日の幸せ	
4	長内中学校	3	上見 葉	小さな優しさに気づいた日	最優秀作
5	長内中学校	3	佐々木 清子	介護の仕組みを考える	
6	長内中学校	3	清水 純夏	自然災害への対策	
7	長内中学校	2	高無 莉緒	支え合う社会のかたち	
8	長内中学校	3	林咲来	小さな思いやりが生む大きな安心	
9	久慈中学校	3	菅原 み生	SNSのおそろしさ	
10	久慈中学校	3	田代 幸	今、変わるべき人	佳作
11	久慈中学校	3	外里 美優	福祉と幸せ	
12	久慈中学校	3	宮澤 美衣	全てを平等に	
13	久慈中学校	1	上川原 未央	地震から学ぶ成果と課題	
14	久慈中学校	1	馬渡 花梨	人との関わりがお年寄りを元気にする	
15	侍浜中学校	3	久世 未来	みんなちがってみんないい	佳作
16	夏井中学校	2	國丹 祈絆	僕とおばあちゃん	優秀作

■高等学校の部

No.	学校名	学年	氏名	題名	賞
1	久慈翔北高等学校	3	いっぽんまつ こと あ 一本松 心 愛	介護	佳作
2	久慈翔北高等学校	3	くぼた しのの 久保田 詩 乃	災害について考えた日	優秀作
3	久慈翔北高等学校	3	くま がい らん 熊 谷 蘭	見えない貧困と向き合う	
4	久慈翔北高等学校	3	ぬか り ち さき 泥 潤 千 咲	福祉という幸せ	最優秀作
5	久慈翔北高等学校	2	おおか ぬか しおり 大鹿糠 葉	老老介護と虐待	
6	久慈翔北高等学校	2	お つぼ ねおん 尾 坪 ねおん	支え合いがつくる幸せ	
7	久慈翔北高等学校	2	おんな とも め い 女 供 芽 依	介護実習から学んだこと	
8	久慈翔北高等学校	2	かみ かわ ち ひろ 上 川 稚 尋	いじめについて考えたこと	
9	久慈翔北高等学校	2	く じ み ひろ 久 慈 未 純	いじめ・差別	
10	久慈翔北高等学校	2	なが ね い さき 長 根 伊 咲	すべての人が安心して暮らせる社会	
11	久慈翔北高等学校	2	ぬか り あゆむ 泥 潤 結	誰かを傷つけないために	
12	久慈翔北高等学校	2	みなみ かわ ゆ あ 南 川 結 愛	私が考える「福祉」	佳作
13	久慈拓陽支援学校	3	さ が こ ゆき 嵯 峥 瑞 雪	支えてくれる人たち	佳作

令和7年度福祉作文コンクール実施要項

1 趣 旨

次代を担う小・中・高等学校の児童・生徒を対象に、福祉作文を通じて、思やりの心や助け合いの心を養い、自分たちが暮らしている地域への理解と関心を高めることを目的として福祉作文コンクールを実施する。

2 主 催

久慈市社会福祉協議会

3 後 援

久慈市教育委員会

4 募集内容

日常生活の中で感じたこと、考えたこと、体験したことなど。
※別添資料を参考にしてください。

5 応募資格

市内の小学校・中学校・高等学校に在籍している児童・生徒

6 応募方法

(1) 制限枚数（字数）

- ・400字詰原稿用紙を使用
- ・小学生低学年（1～3年生）2枚以内
- ・小学生高学年（4～6年生）2枚以上3枚以内
- ・中学生 2枚以上4枚以内
- ・高校生 5枚

(2) 応募数

各小学校10編以内、各中学校10編以内、各高等学校10編以内

(3) 応募先

久慈市社会福祉協議会 福祉作文コンクール係
〒028-0014 久慈市旭町7-127-3 TEL 53-3380

(4) 応募期間

令和7年9月1日（月）～令和7年9月24日（水）必着

7 審 査

主催者で設置する審査委員会で決定する。

最優秀作：各部門各1編 優秀作：各部門各1編 佳作：各部門各1編以上
審査委員会特別賞：全部門若干

8 入選発表

令和7年11月に入選者の在籍する校長に通知する。

9 表彰

入選作品は、令和7年度久慈市社会福祉大会の席上において表彰し、主催者より賞状を贈る。

10 その他

- (1) 応募作品は原則として返却しない。入選作品の版権は主催者に帰属する。
- (2) 主催者において入選した作品をまとめた作文集を発行する。
- (3) 本事業は赤い羽根共同募金の助成を受けて実施する。
- (4) 最優秀作受賞者に記念品（図書カード3,000円分）を贈る。
- (5) 優秀作受賞者に記念品（図書カード2,000円分）を贈る。
- (6) 佳作受賞者に記念品（図書カード1,000円分）を贈る。
- (7) 応募者に記念品（図書カード500円分）を贈る。

<指導にあたっての参考>

「福祉」の「福」も「祉」も幸せを意味しています。福祉というのは、すべての人が、精神的にも、経済的にも満たされている幸せな姿、あるいはそれを実現するための努力のことです。先生がたのご指導にあたっては、次のことがらなども参考にしてください。
また、題名は統一させずに、個々の表現で書くようにご指導ください。

募集する具体的な内容は

- ◇ すごく幸せな様子と、それがどのようにしてそうなったのか。
- ◇ 恵まれていない、満たされない方々の様子から考えたこと。その方々のために何をしたか。何をしたいか。
- ◇ お年寄りや身体の不自由な方々について、考えたこと。したこと。したいと思うこと。
- ◇ 差別やいじめについて考えたこと。
- ◇ 戦争や紛争や災害で、幸せでなくなっている方々について考えたこと。したこと。したいと思ったこと。
- ◇ 自然災害で体験したこと。考えたこと。
- ◇ 「福祉」について日ごろ考えていること。
- ◇ 社会問題（貧困や虐待、老老介護など）について考えたこと。したこと。したいと思ったこと。

では、その材料は、どこから見つけるのか？

- ◇ 家族のふれあいや、出来事の中から
- ◇ 学校や友達とのふれあいで体験したり、見たり聞いたりしたことの中から
- ◇ 近所で見聞きした出来事の中から
- ◇ 地域活動、体験活動、訪問活動、交流活動などに参加した体験の中から
- ◇ 読書体験の中から
- ◇ テレビ、ラジオ、新聞、インターネットなどで見聞きした中から

令和7年度福祉作文コンクール審査委員

職名	氏名	所属団体等
委員長	石川えりか	久慈拓陽支援学校長
副委員長	竹林直美	来内小学校校長
委員	川口冬子	平山小学校副校長
委員	軽石邦子	侍浜中学校副校長
委員	中田悦子	久慈市ボランティア連絡協議会長
委員	安部信二	久慈市福祉事務所社会福祉課長

令和7年度 福祉作文コンクール入選作文集

令和7年11月

社会福祉法人久慈市社会福祉協議会

〒028-0014
久慈市旭町7-127-3
TEL 0194-53-3380
FAX 0194-52-7715

この作文集は共同募金助成金の一部をあてて作成しました。